追悼・つりたくにこ

つりたさんからたびたびお手紙を頂いていた。いつも、病いの苦しさと、何んとか早く漫画を描きたいと訴えて来ていた。そのつど何にもしてあげられない自分が、恐ろしいほどむなしく切なかった。元気になられ今一度、作品に御目に掛かりたかったのは私ばかりでなく多くのつりたファンも同じだったと思う。ただただ残念なこと……。

今は、安らかな御冥福をファンの皆さんと祈るだけである。

「合掌」

長井勝一

つりたくにこの事

上野昂志

つりたくにこさんが亡くなったという報せを、長井勝一さんからもらったのは、六月十七日の午前だった。そして翌日、今度は、映画監督の加藤泰さんが亡くなったという報せを、わたしは、さっぽろ映画祭の実行委員である浜田正春さんから受けた。聞くところによると、つりたさんは京都の郊外の病院に入院中だったというが、加藤さんは、京大病院だったという。この二、三日、京都あたりには悪い風が吹いていたのかもしれぬ。なんとも悲しいことだ。

わたしが初めてつりたくにこに会ったのは、いつだったか。たぶん一九六六年の秋ごろではなかったかと思うが、月日まではっきりしない。その年、わたしは四月号から「目安箱」を書くようになって、『ガロ』とのつきあいもそれまでの読者と雑誌の関係から、執筆者と雑誌の関係に変っていた。しかし、『ガロ』に執筆者として登場したということでは、わたしより、つりたくにこのほうが先輩だった。彼女は、六五年の九月号に、「人々の埋葬、神々の話」で入選しており、その後、六六年の、三、四、五月号で連続して入選していたから、常連の執筆者になっていた。最初に入選したときは高校生だったが、たぶん六六年の三月には卒業して、それから日ならずして上京してきたのだと思う。

わたしの所に遊びに来たときは、確か、東京で下宿ぐらしを始めて数ヶ月たったころのことだと思う。そのとき、彼女がどんな恰好で、どんな顔つきをしていたか、いまでは薄れてしまった記憶のなかではっきりしないが、とにかく、金がないので、パン屋でパン

の耳をわけてもらって食べているという話に驚いた憶えがある。それと、彼女はわたしの家に二、三日泊っていたのだが、朝、ゆで卵を食べているときに、わたしの皮のむき方が不器用だといってケタケタ笑っていたのを、妙にはっきり憶えている。のちになると、彼女は、長井さんの家でコニャックを友だちと二人で空にしてしまうというような酒豪ぶりを発揮したらしいが、わたしの所で酒を飲んだという記憶はない。もっとも、高校を卒業したばかりだったから、それも当然だったかもしれない。そのとき彼女といったい何を話したか、それもすっかり忘れてしまったが、ただ、あの頃はやっていたローリング・ストーズの「ペイント・ブラック」という歌がラジオから流れてくると、それに合わせて身体を揺すっていたのを憶えている。

わたしの、つりたくにこの記憶は、そこで止まっている。つまり、十八歳の女の子のままだ。しかも、顔の輪郭などはひどく曖昧なままで、どうかしたときの表情や声だけが、その記憶に生命を与えているのである。わたしはそれ以後、彼女に会ったのだろうか。長井さんが、この間つりたくさんが来て……と話をすると、不意に鮮明に、その少女の姿が浮びあがるのだが、自分で実際に会ったかどうかは、ついに曖昧なままだ。そして、いま、わたしは改めて彼女の作品を読んでみる。

わからないことが、いくつもある。一つは、これは当時からそう思っていたことだが、話がひどく観念的なことだ。何故こんなふうに観念的になるのか、昔も聞いたことがあったような気がするが、彼女がどんなふうに答えたかは憶えていない。ただ、六〇年代中葉から末に至る空気の中で、ひどく性急に世界を相手どろうとした少女が、観念から自分の身体に降りてくるのは決して容易ではなかったろうという感じは、いまはわかる。むろん彼女自身にも、自分のことを問題にしようとすると、すぐさまそれを生硬な観念に置きかえないと気がすまないような、いってみれば身体感覚の欠如みたいなものがあったことは確かだ。しかし、そういうつりたくにこであっても、七〇年代に入ってから作家的出発をしていれば、ある意味ではもっと自由になれたと思えるだけに、この観念性にはやはり時代が大きく作用していたということだろう。それと、この観念性は、彼女が〝女〟ということに抗って、男たちに伍していこうとしたところに出てきたものかもしれぬと思えば、十分に同情できる。

その意味では、つりたくにこは決して卓越した作家ではなかったが、やはり一人の先駆者であったと思うのだ。SF的な物語の結構にしても、その絵柄にしても、自分が女であることなど頓着せずに描いてしまうということが、のちに続くものを、直接、間接に勇気づけたはずである。そしていま、それに加えて思うのは、彼女が繰り返し、死をテーマにしていたということである。これも、むろん、その当時には、彼女の観念性の現れとしか映らなかったが、いま、こうしてみると、やはり、そのことに強くこだわる何かがあったと思われるのだ。いったい、何故、つりたくにこは、それほどまでに死にこだわったのか。もっともらしい答えを求める気はないが、そうであったことだけは忘れないでおきたい。

だが、それにしても、自分より年少の友人が亡くなるのは、つらいことだ。

つりたくにこさん　水木しげる

彼女は二十年ばかり前（普通の人には大昔にきこえるが、ぼくにとってはこないだの出来事だった）アシスタントとしていたことがある。

その頃はまだやせていて、ちょっとひいき目にいうと、美少女だ

った。

「あんたの部屋はここです」

と四畳半を指すと、

「あ、ここですか、いいですねぇ」

といって、よく覚えていないが余分な話を三十分位、その時、これは少し変った人だなあと思った。

その頃は、彼女は時々「ガロ」にかいていたが、これも変ったマンガだった。

仕事は真面目だったが、スカートが短かいためスベスベした足がよくみえた。

つげ義春さんも、彼女の足をよくみていたような気がする。

「つりたくにこというのは面白い人ですねぇ」

とつげさんもよく云っていた。

しかし二十年前に元気だった彼女が亡くなったと長井さんからきいておどろいた（ぼくは四十位から年をとらない気持でいたものだから）。

考えてみると、知らない間に時がすぎていたのだ。

いずれにしても、つりたくにこさんはぼくのはるかあとに消える（死亡）と思っていたものだから、あまり早く消えたので気の毒に思う。

一度、消えるとなか〳〵この世に現れることはできない。

ぼくはいま「再生」の問題を研究しているが、あの世はあるのかないのかよく分らないが、再生の方があり得ると思う。

どうも話が妙な方にそれそうなので、ここらあたりで終る。

つりたさんの死

永島慎二

つりたくにこさんが死んだと聞いた。

生前ぼくはつりたさんに、二、三度会って居る。たしか一度は拙宅に、何人かの若い人と遊びに来てくれた時で、ふたことみことしか話さなかったように記憶する。まだ若いフツーの娘さんと云う感じであった。

その後、彼女の作品をガロで読んで、あの娘さんが本当に描いたのかしらんと思うような激しさを感じ、不思議な気持ちになったものである。

つりたさんが死んでしまったと聞いた。

だが、全部亡くなってしまった訳ではない。

マンガを描いていた彼女

佐々木マキ

つりたくにこさんに初めて会ったのは、七一年か二年の春、当時猿楽町の文具店の二階にあった青林堂でだった。

彼女は若くて、はなやいで、うきうきしていた。〈きっといい人がいて近々結婚でもするのだろうな〉と私は思った。羽化したばかりのアゲハチョウが日差しの中を舞っているような輝いた印象が残った。

その次彼女に会ったのは、それから七、八年後の七九年の三月だった。結婚後病を得て関西にいるらしい、と風の便りに聞いてから随分経っていた。

私が訪ねて行った時、小さな家の中で、彼女はネコと一緒にうずくまっていた。病気が彼女の姿を別人のように変えていた。私は体がふるえてとまらなかった。しかし言葉を交してみると、世界に対する子供のような好奇心と、鋭い批評精神と、独特のユーモアの感覚を持った女性がそこにいた。

間もなく彼女は何度目かの入院をした。

夏のある日、私が病室にはいって行くと驚いたことに、彼女はベッドに腰かけて、ベッドの脇の病院の食事を載せる小さな台の上にケント紙を置いて、きゅうくつな姿勢でマンガを描いていた。

一度でもちゃんとしたマンガを描いた人なら解ることだが、マンガを描くという作業は非常な体力と気力を要する机上の重労働である。だが、彼女はそれをやっていた。私は彼女に頼まれたマンガの資料を病室に運びながら〈クニコさん、実際あんたは、たいしたタマだよ〉と思ったことだった。

病室で描きあげたその作品を、彼女は某社の新人賞に全く別のペンネームで応募して、入賞した。自分の実力が世間に立派に通用することを確認したわけである。

その年の秋、彼女の夫の高橋氏は私の家から車で五、六分の所へ越して来て、翌八〇年の二月、彼女はその家へ退院して来た。その頃から、彼女と高橋氏とネコのチイちゃんの一家と私達一家のつきあいが始まった。

小康状態にはみんなで遠出したこともあったけれど、やはり彼女はその後も入退院をくり返し、全体的に少しずつ悪くなっていった。

彼女はある時「私もし元気になれても、もうマンガ描く気はない。ふつうのおくさんがやりたいだけ。お料理したり、編み物したり……」と言ったことがある。何と返事していいのか判らなかった。

今思うのだが、彼女がもし元気になっていたら——もちろん「ふつうのおくさん」をやっていたことだろう。料理したり、編み物したり、そして——やはりマンガを描いていただろうと思う。

私達はふつう、病人を励ましているつもりでいる。しかし実は、私達は病人に励まされてもいるのである。クニコさんといると、それがよく解った。

あのジャズ喫茶店のこと

林　静一

つりた、くにこ氏が重い病気にかかっていることは、松田氏から聞いていた。

つりたさんと私は、ガロの第四世代として週刊朝日のグラビアで一緒にのった。

その時のタイトルは〈わからないマンガが流行る！〉だった。

つりたさん本人と逢ったのは、その後のガロ忘年会である。

当時ガロ編集員であった高野氏に、

「あっ、この人がつりたさんです。」

と、つりたさんをそっけなく紹介された。

つりたさんを見ると、私の顔を目をちょっと細めて見た。

「あっ、この人は近眼なんだな、」

と思った。私はつりたさんの左側に座らされた。座った以上二、三、言葉をかわさなければならないと思い、つりた氏の漫画に出てきたジャズ喫茶店について聞いてみた。

「ええ、大泉学園にある喫茶店です。」

と、ちょっと驚いた様に答えてくれた。

その頃は辞めてしまったが、三年ほど前まで勤めていた東映動画の通勤道に、それはあった。その事を話すとつりたさんは合点がい

ったのか、近眼の目がちょっと明るくなった。
あのジャズ喫茶は、撮影所とリブァーというランチ屋の細い道を駅の方に歩くとあった。右側が住宅街で、ちょっと左へカーブする道の左側にあった。
カウンターに六人ほど座れ、ボックス席が二つほどあり、奥の便所から臭いがただよっていた。
つりたさん、あの店のどこに座ったのですか。もうちょっと駅の方に行けば、ゆったり座れる喫茶店がありますし、「リブァー」だったら、有名な男、女優が見れたのに。
なぜ、あの店なんですか。

フライト

勝又 進

つりたくにこさんに「音」（六九年・ガロ）という作品がある。
ある朝目覚めたら自分の姿が消えていた男。
彼は己れの存在を確かめる為に、絶えずわめき続けなければならない。黙っていると自分がいるのかいないのか不安になるからだ。
何日かたって、喋り疲れた彼は黙ってしまう。そしてその時から彼はほんとうに居なくなってしまったのだった。
死後、肉体を離れた魂は、こんなふうにしばらく舎婆とコンタクトをとりながら、この世に留まっているのかもしれない。
八〇年に風木繭のペンネームで発表された「フライト」（ヤングジャンプ）が彼女の絶筆となった。
当時彼女は膠原病を患い、七年越しの闘病生活を続けていて、この作品は病院のベッドで描かれたものらしい。
絵を描く美貌の主人公と鳥のように空を飛ぶことに憑かれた青年との出逢い、そして別れ。
嵐に巻かれ消息を断ったセスナ機は、時空間の裂け目から、数千年前のエジプトの地にフライトしていたのだった。
女の住む洋館、ファッショナブルなドレス、光きらめく地中海めぐりの旅、そして異教の地エジプトでの二人のドラマチックな再会。
レディスコミック風に描かれたこの作品には、繭の中のサナギの見る夢、いつか来る飛翔のときへの不安と祈りが感じられる。
膠原病というのは治療方法がまだ確立されていないらしい。老いて、女をやめたとき、自然回復することがあるという、女にとっては残酷な病気らしい。改めて作品集を読み返すと、病に囚われた初期にマネー（七四年）、マックス（七五年）といった不毛な性を生きる男娼たちを描いているのに気付く。
黒く渦巻く死の川のほとりでスキップしてみるマックス。
うつろな目をした占い師マネーの歌う古い傭兵の歌が胸に迫ってくる。

いつまで生きるこの身やら
いつがこの世のお別れか
流れ流れていきながら
なぜに陽気な胸の中